鼻ったれ

文・竹田真木生
絵・南家和香子

むかしむかし、三百年か四百年くらい前の頃、武士という人々がいた。
さむらいと呼ぶ人もいた。
長い包丁のような刃物をインゲン豆みたいな形の鞘に入れて
腰からぶら下げて歩いていた。
時々それを抜いてエイやと振り回すと、木の枝でも、飛んでいる鳥とか、
時には人間の首もちょん切れて地面に落ちるのだ。

かまぼこの ぶし

あるところに１人の武士がいた。この武士は、
おなかが減ると懐から鰹節を取り出し、ガシガシかじり
始める癖があった。鰹節にはもっとむかしから、
茶色のような灰色のような虫がつく。
鰹節につくのでカツオブシムシという。
鰹節をかんでいるこの武士も鰹節のにおいが
するので、カツオブシムシが飛んできて、
周りをぶんぶんやっている。

それで、こどもたちは、この武士のことを
「かつおぶしむしぶし」と呼んでからかっていた。
首をちょんぎってしまえる刀という刃物を持っている
武士を子供たちは怖くなかったのだろうか？
子供たちは知っていた。この武士はほんとは優しい男で、
こどものことが大好きだということを。
子供が周りでわいわい騒いでいる間、男は構わず、
鰹節を噛んで、でくでく笑っていた。

すると、洞の陰でおじいさんと
おばあさんがしくしくと泣いて
いるではないか。

ほこらの前にたった地蔵さんの
あかの秋の午後、いつものように
ほほこらがらおばあさんが。

武士は、二人にどうしたのだいと尋ねたら、
おじいさんが、悪党が来て可愛い孫娘「おまめ」を
さらっていってしまった。
それで泣いているのじゃというではないか？
カツオブシムシ武士は、それを聞いて猛烈に腹を立てた。
正義の味方なんだね、この武士は。

よし、拙者がその悪党を捕まえて懲らしめてやろう。
そやつはどっちに行ったんじゃと老婆に聞いた。
おばあさんは、西の方にかけて行ったといった。
それで、この武士は西の方を向いて、カーッと叫ぶと、
どこからかカツオブシムシが集まってきて武士の周りを
ぶんぶん飛び始め、渦を巻いて黒雲のような塊を作った。

カツオブシムシ武士は、自分の体臭で
虫を操ることができるんだね。
怒る気分になるとムシが集まってくる。
このようなにおいのもとは
フェロモンと呼ばれている。

雲は回転を速め、ジェットエンジンのような
鋭い音を立て始めた。すると、
不思議や不思議。カツオブシムシ武士の体は
地面から持ち上がり、空中を歩き始めた。

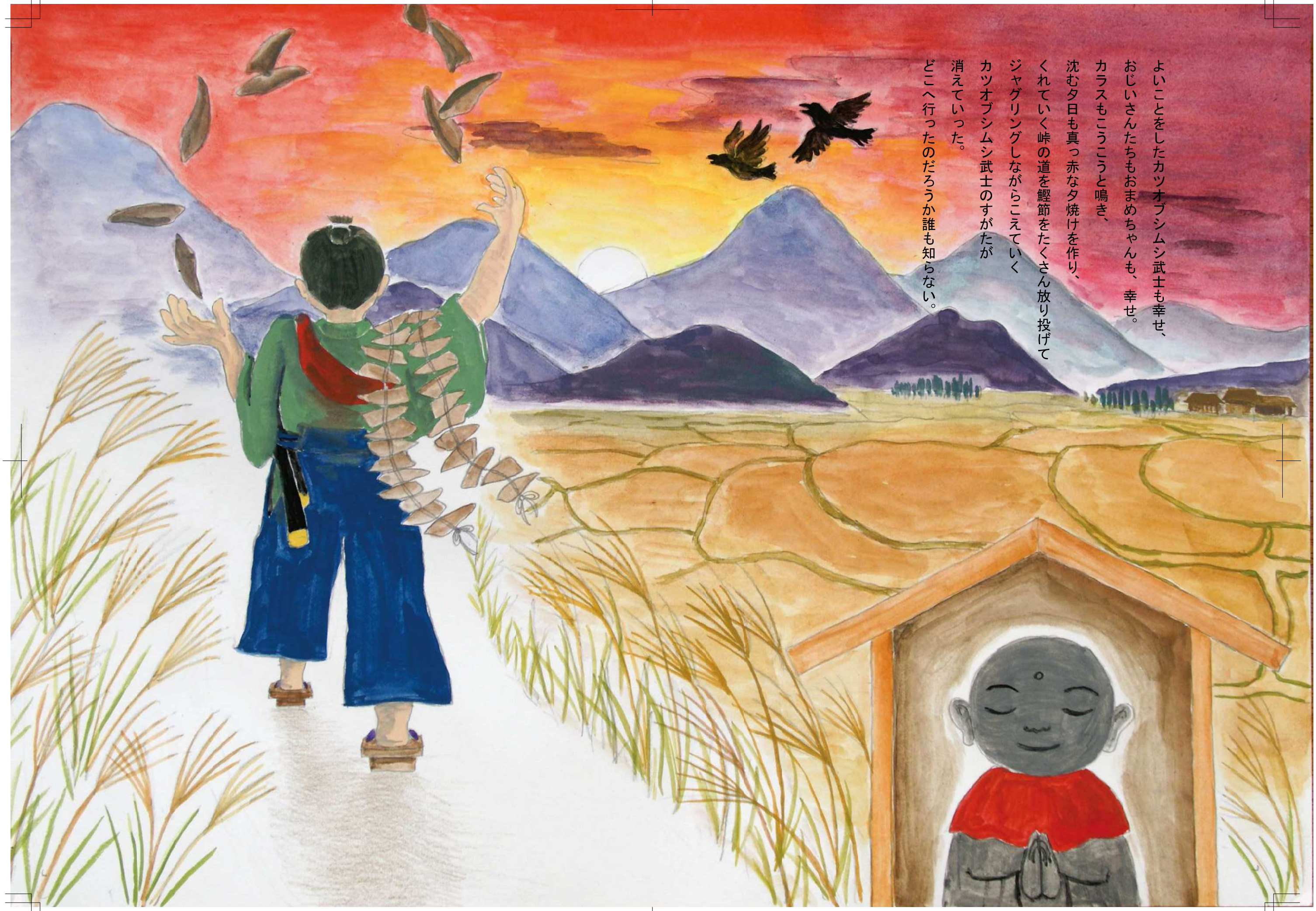
再び、カーツがとどろくと西のほうに、
すったかとっとこ逃げていく悪党が見えた。
それを追いかけて猛スピード。
顔は赤かったのだが、この悪党は
赤鬼だったのかもしれない。
お酒を飲んで赤くなっていたのかもしれない。
髪はぼさぼさだったので角はみえなかった。

10分ほどで追いついた。悪党のほうも驚いた。
キーンという怪音とともに黒雲が迫ってくる。
肝を冷やして、おまめちゃんを放した。
それを抱き上げて 直ちにおじいさんおばあさんの
ところにもどった。

悪党は懲らしめのために、
妖刀リュウノヒゲを一ふるい、
パンツのひもをずたずたにしておいた。
角も2本生えていたが1本を斬っておいた。
片側1本の角の鬼では、鬼の世界でも
恥ずかしくて歩けないだろう。

こうして、おまがりゃんを
ひいきえんがばあさんに
展してやった。
ひいきえんがばあさんは書んで、
城主に問うた。
このおれたちえでもお教します。
何をお望みですかい。

そうよのう、武士はこたえた。
鰹節がいいな。鰹節を10本くれ。
はいはい、おじいさん。どうぞと
鰹節を30本をひもで縛って、
あと10本を風呂敷に包んで
ちゃすぐシンムシ武士にわたした。



よいことをしたカツオブシムシ武士も幸せ、
おじいさんたちもおまめちゃんも、幸せ。
カラスもこうこうと鳴き、
沈む夕日も真っ赤な夕焼けを作り、
くれていく峠の道を鰹節をたくさん放り投げて
ジャグリングしながらこえていく
カツオブシムシ武士のすがたが
消えていった。
どこへ行ったのだろうか誰も知らない。